繪本豐臣勲功記

初編 七

へ遠13
2209
7

門へ遠13
特
2209
巻 7

繪本豐臣勲功記初編卷之七

目録

木下視美濃攻見破上杉心
附奪主水書
上杉爭殺帰伏木下智勇
附秀吉勸軍

繪本豊臣勲功記初編巻之七

櫻澤堂山 編輯

木下説義濃攻見破上嶋心属奪主水書

意馬心猿を画がゝるわや。信長秀吉を潜圖せるわや。猿よく馬ゝ騎繪あり。或ハ猿ゞ馬を牽ゐり。實ゝ馬猿ハ中ゝ紀りの欲。然もれば星宿も徒ゝ也。信長ハ午のうまれゝ秀吉ハ猿のうまれなり。君臣の中睦しゝ窪。婆膠もられゝわいちゝ。然りとゝ織田信長ハ。今川上洛の風聞をつひく。軍の評定せらるゝ。諸老臣の諫言ハ。惰弱の詞のゝ言ゝ一圖信長の意ゝ嶇ゝ。此上ハ無評ゝ迫ゝ。藤吉郎の来るを待く。渠ゝ異見を听んゝ。と待せあゝ程もあゝせゝ。

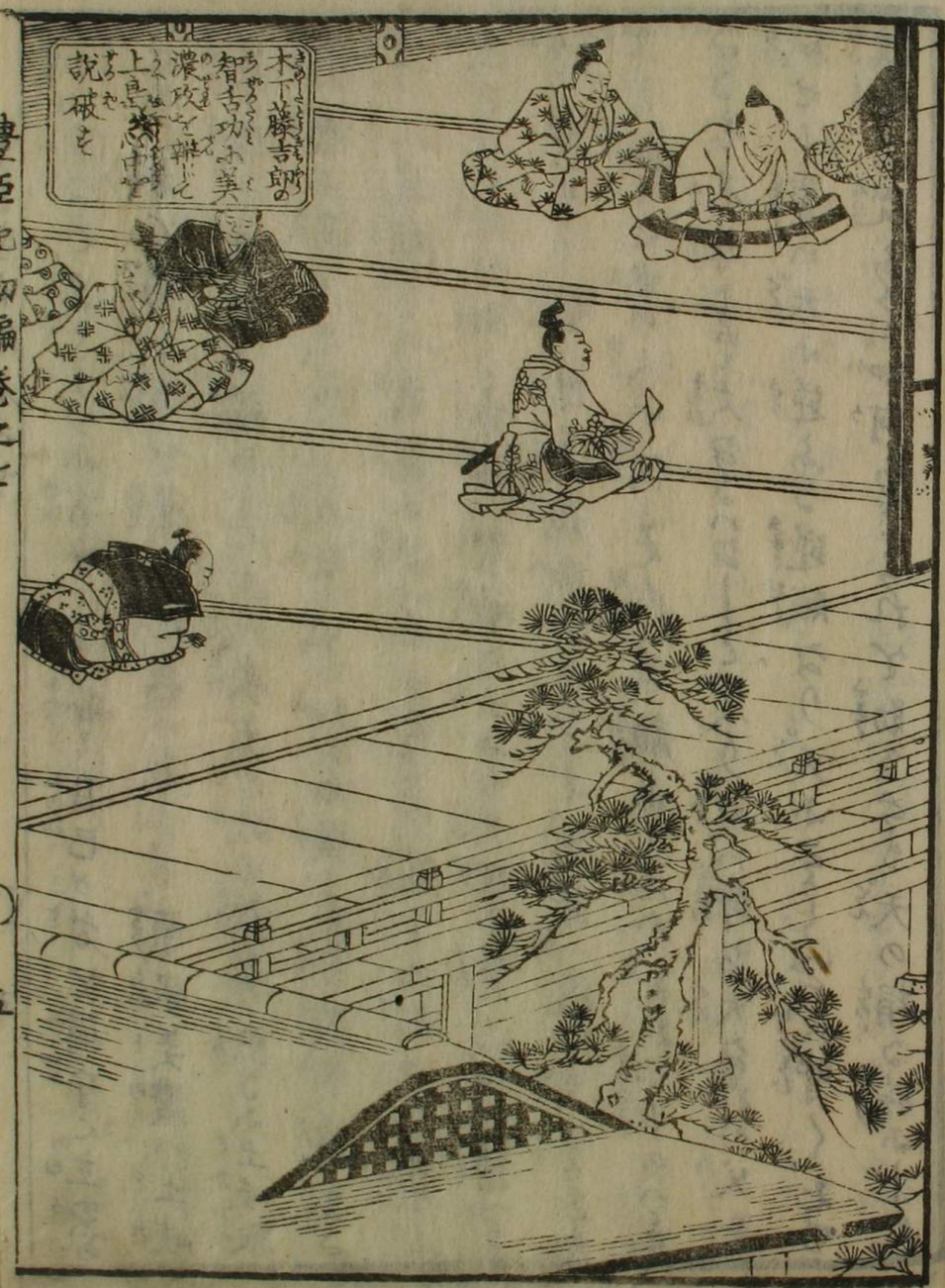
木下秀吉出仕しに。静ふ自己が席ふ座を。信長遅詫ゐふ体わく。いのふ秀吉。今川上洛の事ふつに。迎く合戦をるがよのきや。深く和睦を遂べきや。所存を語をと命をる時。諸老臣心中ふ。定めく木下主君ふ対し。血気の勇を進めりふさん。陽き猿面が顔色よと。睨決てぞ北へこそ。晌ふ木下後を眄を。ひとりふこゝ咳ゐし。詞温和ふ言状を。命の両條左右とも宜しく。いづまを何をと評めぐし。然ども切覚命せを奉に。黙止べをふ非ざれば。這両條を合揚ひく。大業をゐる謀畧ゐり。と所に君臣雙共ふ。顧ハ又如何ゐる術ぞと。不審ゐれば藤吉郎。今諸老臣が諫議せらる。和談ゐつとも宜しとゐ。柴田佐久間林の門。木下今日何とに。斯様ゐる詞いふゆゑと。悦ぶ色を信長獨。気色を損じて声振をし。藤吉郎何をゐりふをぞ。との信長を今川の幕下ふ属とゐりての外ゐり。噫諱をしと怒らゐ。ゐへば。藤吉郎推返に。否然ふあらぞ合戦ハ。いゐふも勇くしく。あをぞせと。言はを柴田脩眼を瞋らし。木下何を礼言をゐぞ。合戦もせよ和睦もせとハ。餘ゐ君を嘲哢をゐる。否礼言ハ賞と言さぞ。今川義元上洛の沙汰ハ。今ふ叡めぬゐゐんぬれば。勿く急ふハつをあるべくぞ。其をゐに一遭和睦をゐし。義元爾彭をる隙ふ稲葉山を攻ゐ。今齋藤の一族ハ。君の為ゐハ舅の仇。その為道義龍を。誅しゐふハ義兵ゐり。義龍をゐふ滅さば。美濃ハかのづく御領とゐるべし。如ど自軍の小勢ゐるうへ。今川義元欲ゐるをハ美濃と軍もゐりぐし。況ぞあふ今川が。上洛の沙汰あるとを聞。

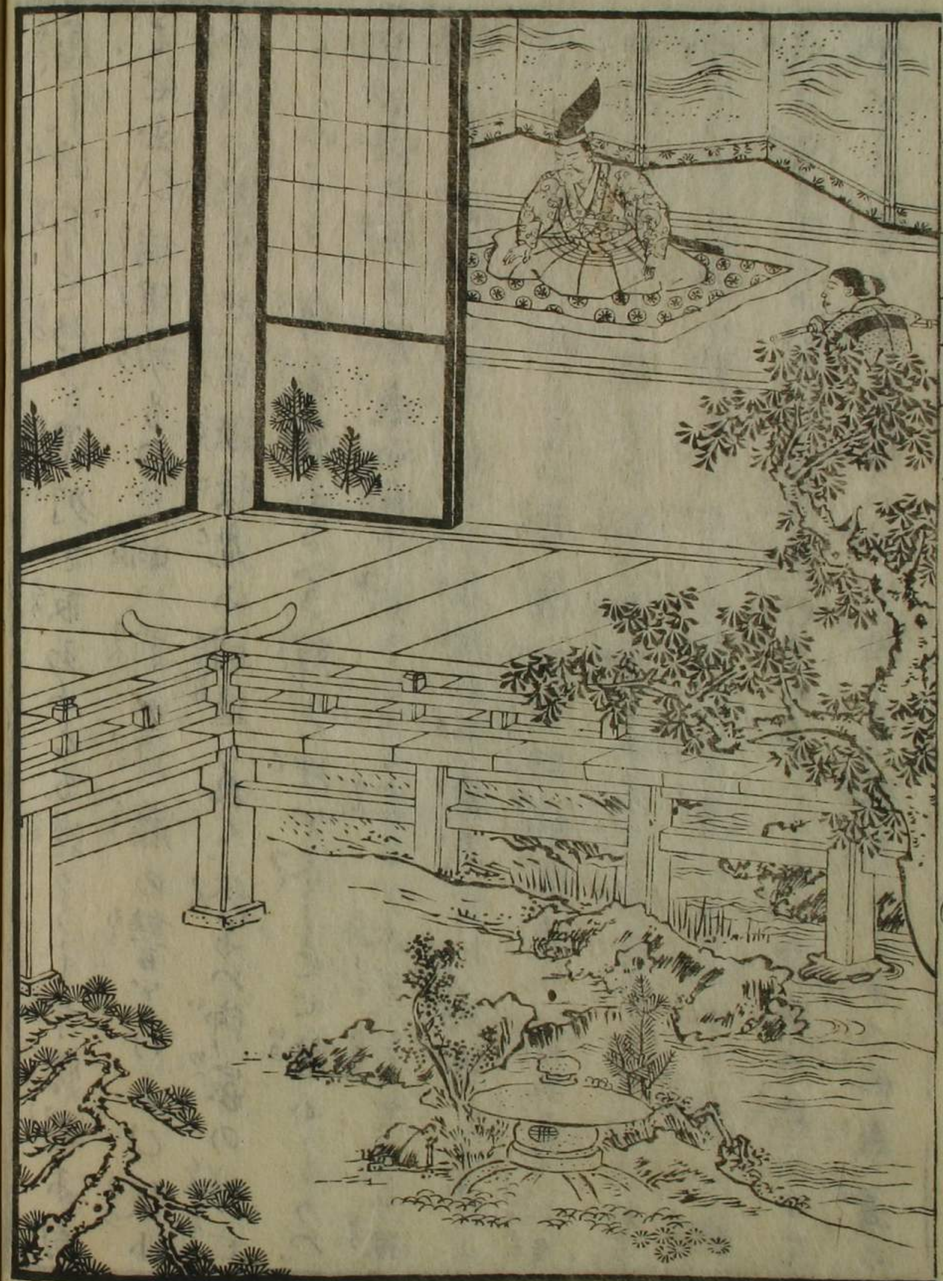
まゝ偽く和睦ひるべし。今川和談を承ぢせ一晌。加勢の車を謂やるべし。さて義元加勢ハせぞとも。尾州乱入の愁ハ濃〻ん。只其隙ゑ義濃と平均。濃尾両國の勢を協せく。義元と軍しぬで。何條難き綜ゝひ〻ん。是万全の計畧とゆゝ信長所しめし。藤吉郎が詞然るべれど。原齋藤ハ大家ふしと。殊ふ大河の要涯あり。是を繫ぐこと容易ゆるまし。「吾くたれ由ハ術あり。亟二亟三ふ川さへ渉さば一戦のうちふ大を放ち。稲葉山を焼起んふ。美濃武者何万あれべとも。如何ぞ怖懼ぐ〻んや。原来齋藤義龍ハ父を殺せし悪逆人。誰ゑこれを悟まざるべき。頃をひろく逆をうゑ。必勝の時撓相変るべし。況や美濃の武士ハ心力法く胸乳拙し。自軍の勇士一人そりて。敵の十人廿人ゆも當るべし。たれゑるふも。

頭ふ連軍のあるを聞ぢ。勝大将義龍ハ暗昧愚痴の生質ふ。武士を養ふ道を知らぢ。亟道の下ふ勇士ハあらじ。今ゑ〻ぞんべ何時ぞ待ん。伐ハ勝べゑ晌熟しゑ。快御心を決し亟人と。言決しゑ目と目を覿合せ。頻ふ勧めまゐ〻せしゑ。信長深く美濃攻を心ふよしゑ思さねど。思材ありげふ木下が目注せしを怪しを亟ひ。然べまゐ。這義ふ熟く思案ぢべしと。宜ひるゑと紀。座の末猶よる声ゆん。木下氏が計る所。ゆゑての外ふゆとゆふを信長聞とゆれば。是ハ上島主水ゆり。所謂いゑふぞと宜亟人ハ。主水謹ぐ言ぢ。今木下がりふさる。美濃國ふハ勇士もなく。義龍愚昧の悪逆人。只一口ふいちるゑハ。傍若亟人と謂ハべし。彼國往古ハ。源頼光の任國ふしと。子孫代〻國ふ残ず。先祖の

武勇を今ゞ世ふ。伝へ〻綽ハ貪人の。遍く耳目ふ知るところ。小臣英濃を玲瓏時境。齋藤家の名士を粗所を。日根野備中守同弥治右エ門。齋藤九郎左エ門。長井隼人。小牧源太など。いづれも貪是万夫不當の英雄なり。今木下が言ゆゝ〻べ義龍何ぞ濃刈を欲慎むべを。綽を得んや。愚昧の義龍なりとの人ども。故道三のさたよりの威勢さんよ聞えゝ。況や近江越前ふ。浅井朝倉を縁家とを。渠儕ゞ加勢をなをを〻べ。渡海の大象翼を生ど。登天の神蛇。雲を得るふ異なを。いづゝ容易ふ伐るべき。まゝ今川ふ加勢をこのむも。最危き御事なを。如ゝを諸老臣の。御諫めありふしまなを〻せし如く。暫く今川の幕下ふ

属し。時節を待く濃刈を取ふとも。遅〻〻〻。今濃刈ふ向ちせをひ。備軍功もなを。晌ハ。前ふ齋藤の讐をむをひ後ふ今川の怒を承。前狼後虎ふ困逼られて。終ふハ御家の滅亡ゝゝん。よゝ〻御遠慮あるべき綽。と理を尽しを諫めしゝべ。柴田佐久間も這義ふ同じ。然るべしと言をを木下。首をうち振諸ちゞ。冷笑ゝ云ゝるゆゝ。上島殿の英濃武士を。稱美しふ置々しさよ。小臣もまゝ齋藤家の。剛臆賢愚を能知まゝ。一日ハ時滞留せし。旅客の暇の推量とハ。大ゞ相違のおもむきなり。咱ハの所を諦ふ聴を。ゝ。ゝ日根野兄弟。長井小牧ゞ輩ふ。剛気の所ゑハありつれども。貪是西夫の勇ふ。一身脆き故士なを。智をなを渠を倒さん綽ハ。苗を抽ゝ猶易ゝを。世ふ西美濃の


木下藤吉郎の
智舌功を奏し
濃攻を辞して
上意を心中に
説破せ



三人衆など。異くしげに言せども。各く自己が分を講守し。主家の
ためにに力を竭し。命を棄て忠義にあるべし。原来美濃は土岐
殿の領し来りし國にして。三人衆も土岐の臣なり然るに土岐殿
齊藤に追はるゝとなるに三人衆が素知らぬ顔して過し。將そも
道三入道殿。子の義龍に攻られ給ふとも。這をも救ふ所なし
然られば逆を助る毒族。智勇の士なれば天理に背く功を遂べき
地にあらまし。齊藤義龍威をあがめしに。美濃一國に主なりとも。
父を弑し世の人に何と向べき顔あらんや。それ三千の
るも。不孝よりも大なるにあらしとのたり。父は即ち天なれば父を
弑せし輩は。天に逆ふる逆賊なり。天にさからへば人背く。その
旗下に從ふべく。如何ばかれを助るとも天の捐る族にしん。

功を遂る所謂なし。さるべき美濃の人なりとも。織田殿に降参
なし。其分の智勇を顯さば。さるもなをさらぬ天に順しん。天に
逆ふを伐なれば。自己こそ智勇にあらざる。功名忽然と顯
はん。鶏沼の大澤。菩提の竹中。西美濃の三人衆など。原来
齊藤の家人にあらざる。世に連る時に陥ふて。當時旗下に
属せるのみ。然らば世道の美濃にあらざる。偖に天に逆ふん
よりは。有道に属し渠を伐なれば最も正路なり。謂へし。朝倉
浅井の人こそ。義龍と中親なれども。逆天の人に加勢にあるまじ。
縁家をあらしこれを謂べ咱君なれども同じ徒。渠疎なれば
あも疎し。奥に心なるべしを。水きる心のなにあらざる。加之男の
仇を。伐んと思起る。徳。信長信義全に在り。信義を以て渠を

伐ふ。天道なほとん加棐力彼を日棐とよむこと彼に假字棐は実字なれば
ところなれば。天助の君ゆい背くべうらぶ。故ふこと御軍を。心勝
といふ一つれと理非分明ふ説譯しうべ。主水も今は言句なく。
閉口して赤面を。柴田佐久間も這理ふ責られ。詞を放の分別
なられば。徒不興ゑふひ久うう。信長つくく聞ゆれ。藤吉郎
がりふまた條の。毛頭だりも虚隙なられば。既這上は論議ふ迫
まるを。予が心中は決しうう。と言并後殿ふ入あへば。諸老臣ふも。
名くふ自邸へ退去せり。然るふ秀吉唯獨退散なさ行り
るを。信長悦ふ昭倚られ。今美濃攻を勧るうち。目注せしは
何意ぞ。こ宮せあふを木下拜膜。これ小臣が計畧ふ。齊藤
攻を考あへ。と言しとしは御座下ふ。虚實を窺ふ反間の。逆徒

のあるを欺くなりと聞て信長大ふ驚ぬ。今下は家ふ反間の
らせものありとふむはね。いうなる輩を當く謂。ところふ木下
声を低ふし。上島主水ゆくはうり。其叛より渠奴めは。美濃の間
者と推量せしぬ。小臣腹心の者をもて主水が家ふ奉公さし。虚
實いうふと窺なるふ。齋藤の間者ふ相違なし。證拠はいらゆと
一箇の密書を。采出し呈げていふゆう。這書は主水過日我獲ぬの
弥助といふ者。それを濃州生とひと。健児奉ぬさせるふ上嶋
主水心浅くも。弥助を実の美濃生と思ひつめ密書を裔
せ。渠が兄こそる。鵜沼城の大澤次郎左エ門が許へ使さしうう。其昭
兄が返簡を即ち奪ふ。なきつる書なり。其上ふもなれ御前ふ
置く。證となるべき招道さなせんと今日評議の席を設ひ美濃

於の事をのゝしるべ。業ふ違えを上島が。怒声して濃州武者を稱美ゐ。うるとがうくふ。緣家指化まて言出こり。これ目前ゐる間者の證拠ゆゆしきぞ御由断ましまをゐと言しのぐまべ上総助。肝ふ銘じて感悦あり。苟且ゐしぬ木下が。遠慮深計大張こく。實ふ憑のしを忠臣ゐ。然らば今川とハひゐゐさん「千お」祇ゐもひ匡和睦の沙汰い思ひもよらぬ。義元上洛ゐるゐしべ。境面ふ歩発ゑひ。御合戦こと然ゐべられ。御勝利ゐる絆ゑゐ。と听く信長まをく恭悦し。藤吉郎を返されゐり。然ゐとふ上島主水ハ。木下が祠を遮くこれども。却て痛く説破られ。愈く秀吉を怨ゐ姫。亡ゆめふせんと計らひ。柴田佐久間ふ強しんりふゆう。渠が武兵い偽道ふして人を惑

ゐ族ゐれば。果しんのちゆハ國家ふ仇せん。御老臣の賢くふも。疾く其機を察しゑひ。渠を退けゑん緯を君ふ勧めまゐしをべ。絶ゆハ緯くしゐ大事ゐらん。とゆふ柴田も実ふもとおゆひ。仍さ及渠奴い今ゐ対強し。已後自品経昇らべ。定めく諸士を眼下ふ見早し。いゐる事を做さんもゐれど。悪木芽枝を剪ざれば。斧鉞を用る術あり。然ゐども主君藤吉郎が佞辯利口ふ惑され。容易これを退ぞけ難し。よゐゐ方便ゐゐ有やゐと。いふふ上島庁膝ゐをめ。茲ふ究竟の偉こゐあれ。過朝渠と小臣と鎗の較量ゐせし後。ゐゐりふ已ゐを罵り嘲る。騎安うしゐ心ありふしぶ。小子渠とこちなひゐべ。只一槻ふ突殺し。後の愁を断んとおゆゐ。晞ふいゐ倚のとりゐ

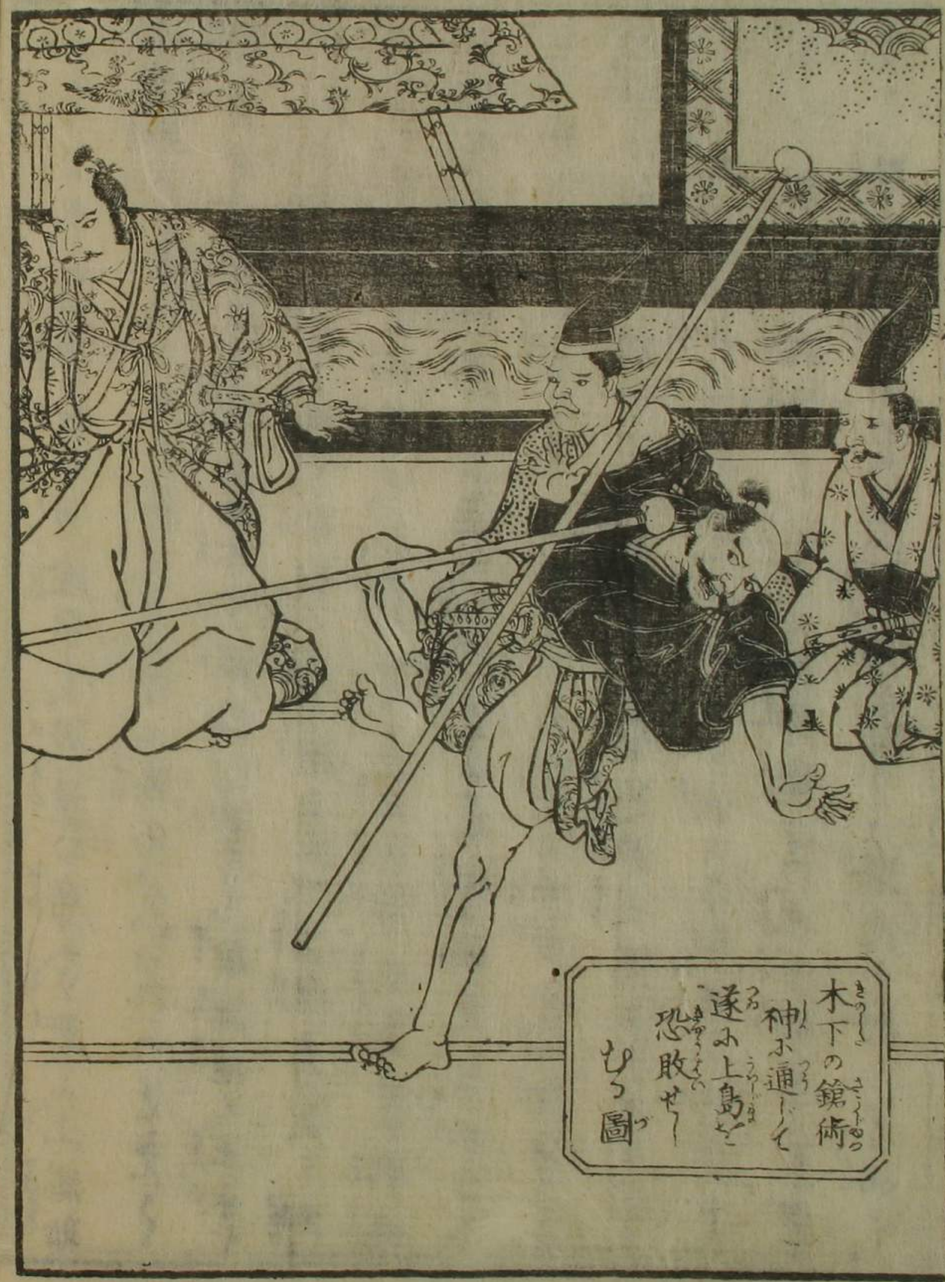
りて。恪小臣と木下。と鎗の較量の御許容あるべし。ひとしきに
頼ひ入れまつると。言をも権六右エ門尉。甚はよろこ事よと赤起
こちの織田殿の御前へ出。両士相を齊ふるし。這比評議の
席ふかひて。藤吉郎が言せしむる。御意ふ稱ふやうなるべ
如何ふも危くはとて。諸士の心中一致せど。諸士の心區なれば。ひと
つる妙計奇畧ふまれ。施得と能ふまし。とれ藤吉郎が新系
ふして。利口遊辯い然ことなるし。其分ふ武勇ある徒ぞひとの
ちくさる故なるべし。先日の猪の因もあれば。上島主水と藤吉
郎。と御前ふかひて雌雄を決し。藤吉郎ぞお贏なるば才智と
いひ武藝といひ。他衆信しめふべし。こちへ木下輸こりとも。
主水ハ主の師範なれハ。藤吉郎の恥ふもなるべ。早速両人が

較量の義。命屬られ西そんふ。と詞を尽しと勧るふ信長心よ
備とそハ藤吉郎を妬む族ぞ。家宰倚へ較量の縛を。ちくめく
謀をしめるべし。主水ハ名を以ち巧者なり。藤吉郎ハ那量の
修練あるあやふ行ふるし。と家宰倚への返答ふなるやはのせ申入
機會とそあれ。藤吉郎出来も。信長休ことを以ふ西ちを。なんち
主水と較量ちべきや いふと問ちせ申ふを秀吉異義ふ迫ちを
諾受せり

上島爭鎗歸伏木下智勇屬秀吉勸軍

雨ふしんと欲ちる則ハ土沙濕ひ。風ふらんと欲ちると元ハ瓦石
乾く。天地猶斯のごとし。況や人ふかひてをや。思ひちふある
ちたハ色とふ露ると木下言下ふ美濃を誹て。こちまち主水が

素姓とは。おのれと招道さをさうしへ。魏と囲く趙とをらふの謀より出るゐ〳〵ん。然ども主水はそれを悟らざ。体畧しくも今又ふたゝび。較量と望む心根へ。底計とゐた愚ゐ〳〵ぞや。然程ゐ上総助。木下上島両士をめされ。御前ゐおひく較量の事を命らるゐ態輩とも。謹ぐ御話ゐふし。あらしく木下御前ゐ朝ひ。上島ゐも小臣ゐも。共ゐ御内の武明ゐれば。甲ゐうとも乙ゐうとも。遺恨あるべをやうゐなれど。懇とのゐあゐいへば。勝負ゐ屈く美別を立てく存ぜるゐり。小臣主水ゐ突勝べ。上島をゐく小臣が家の奴ゐゐをべきやう。命令られゐざさるべし。主水小臣ゐ突勝べ。小臣主水の奴とゐ〳〵ん遠義御絆あるべをやと。信長听しめしゐひ。主水いゐと問ゐふを。小臣も斯存しゐり。おゐしゐと上島主水。その侭起く多徐ゐし。較量の席へ立嚮ふ。上総助よを西人へ。長八尺の竹絡て。左右へ二條あゐられ。つと見えく勝負を決せよと。命せゐ水下威儀と整し。搶推抛く。主水を迎ふ。上島ゐ預くよを。好む八尺の搶ゐれば。咱練きさべし術ゐゐく。只一掬と跳蒐るを。乙ゐうと藤吉郎。生質ゐる剽姚自在天授の修練ゐ上島ゐ。心中ゐちまち驚る怖を。渠奴ゐゐゐて斯ゐく碌磨のゐどのおとろしを。這ぞ咱多の浮沈ゐりと。秘術を尽〳〵闘ひしゐ藤吉郎が滴放搶尖見えを見えづと。其疾事。龍ゐ吹ゐく騒雨の如く。虎ゐ吼らる馳風と侶ゐも。憤吽ゐみしく掬起ゐふ。主水の搶尖素ゐろ。木下ゐゐとゐを責く。脱臘と睨らめば主水が眼。さゐゐ〳〵眼光ゐ射らゐ如く。



木下の鎗術
神ふ通じて
遂ふ上島を
恐敗せし
ひう圖

全身を〻んで横きはゞ。こゝ朽臧と思ふるゐ。ちやくも木下
上島ゟ。槍をめ〻むとお墜し。只一棚ゐつゝふせゟ。信長おも
ちゝを座を起ゐひ。扇を冠きんあゞぎ起。秀吉勝ゟ。天功こゝ
と讃ゑ〻び。柴田佐久間ハ楽ゐ想違し。鞠果てゝ悃然ゟる。
主水ハ地ゐも没ゟゝ面目。実ゐ木下ハ凡夫ゟ〻ゞと。首を垂く
亀伏ゟ。信長顔色兼しく。上島ゐ向ゝせゑひ。約せしごとく
今日よゝ。藤吉郎が奴とゟり。嫉妬偏執の心を断忠義をつく
しゝ仕ふべし。と命せゐ主水カゟく。謹ぐ奉諾を。依て木下ゐ
ゟゝ一ゑ〻び。藤吉郎ゟれを請率。然しゝ土水ゐゟもむゟひ。約束
といひ誠意の上ハ異儀ゟく咱ゐゟゞひゑ〻言徒ゞる思材ゐ
あれば。まづ咱宅へ来られよ。とゐゐも水ハ阿容〻。と後ゐ従く

退出しゟり。後ゐ残りし家宰の両人柴田佐久間ハいと不興
ゟゐゐゟゝゟるを。信長をく咱ゑひ上島主水ハ中國の寵人ゟり
とゟひしハ誑口実ハ齋藤家の間者ゟゝ。藤吉郎ゟ智をいく
渠が実否を正さんゟゐ遠比評議の席ゐおひて美濃攻の詞を
言せしハ全く主水が心中を探誠ゞゝめの計畧ゟり。然るゐ今日
藤吉郎主水ゐ打勝奴とゟゝ俳返ゟる絆ゟれば。さゞめく渠が
素姓を正しゝよゝゐ謀ひゟゐゐゟゝんが。某輩侍も木下が今日
の武藝をゝしゟゝハ新参ゟりとゝ侮ゟべゟゝゝ。忠義をつくゝ秀吉
ゟれば已後各く懇志を通じ憎まゞ軍議を於ゝゝべし是信長
がゝめゟるゝ。と命せゐ両士拜膜且驚く退出しゟり。然る
ゟどゐ秀吉ハ主水を俳ひ咱家ゐ帰ゝ。渠を閑所ゐ招き容

今日御前の勝敗いかゝしようぞ絆ふこと〻ゝぞ心ふゝみあふる。分不屑なゞ〻快足下が器量とのひ武勇とのひ尋常ゝらぬを解知せる。あゝ〻勇士を徒虚ふ汚名ふ分をそこ〻おそん絆の最おし〻く思ふゝり。如何ふもなし〻良主ふつゝそを忠孝信義を全させ義名を末代ふ残させんと足下ふ意遣を容まんゞゝゝめ奴ふせんゝど望をしも。いさゝ驕慢の心ゝゝぞ猶ゞふい足下を順路ふ帰せしめ逆路を去らせん咱心中ゝゝく寸分も欺誑なゝれば足下も咱を疑心実事を咱ふ語られよ足下が美濃の人ふしゝ齋藤家の反間ゝる絆乃郎徹底ふこれをゝりゝゝも。素織田殿ふ奉公せしふ際を窺ひ信長を刺しゝ齋藤のゝめふ忠を竭さん心い鏡ふみゝる如し。その所志忠ふ似ゝれども。誠の忠とゝゝべゝ〻ぞ。大低忠を竭さんふ。まゞ其君の徳不徳順逆賢愚を鑒ぞしゝ。徒ふ辛困しふこと。従来妬懐千万ゝゝ。今い藏をふ暨ぶべゝ〻ぞ。白地ふ語う聞ふ人。と問ふゝ上島大ふ驚ゝる。ゝゝ〻ゝ驚も肚胸ふ塞ぞ。首を低く居ゝりしが。心中深く慮るふ。藤吉郎が才智藝能迂くゝらぬ不凡の所行。おゝどろ絆ふ快知ゝり。そゞ上今日陰を合せ。ゝゝを朝ふく爭ふ眴渠が眼光閃きゝゝて。さるゞ〻日憚ふ向ふが如し。これゞ為ふ咱目眩ぐ。ゝち輸ゝることを不思義ゝれ。這倖必定天神の扶助を切ゝりしゝのゝるべし。と思ひ培ゝいと怖しく。我慢の心乳者と消。嫉妬の執念烟とさゝく。真実心よ帰伏ゝし。藤吉郎ふゝち嚮ひ。愕入ゝる御眼力今さゝゝゝふと

奮へんやうなし。革の内人とうつるうへハ何をか躾しりふをべし。御推査の違ひなれ。小臣こと濃州鵜沼大澤次郎左エ門重時の弟大澤主水重綱とめふをもの。義龍の憑をれ偽と清測の来を三年已来徒の心を確きしも。世道の義龍天の照覧の漏されば斯顕るゝも理なり。這上ハ速の小臣が首を刎禄を奉ふる分をのつて君を誑く大罪を糺し世と覚斯の一言木下所ゝうち笑ひ思ひふるゝざる詞を言ふ我君足下の誅せんとなるべ斯きく穏慮の命せあらんや足下兄弟原来齋藤の家人なるを時節のつれく麾き申ハハ是罷ことを悔されべなり。今義龍ハ天誅を道なる道なる逆悪人をもが為の竭忠をるとも天道いかゞあられむべき。織田のつゝへく三年がうち。徒の辛労をせられうと思ふことをかろうられ。明悟の織田殿。快よを足下の素性を査し。密の命属られるるもの。乃夫遠の足下の素性を探を知らり。こを尋常の大ねるべ。忽ち誅をかふべられど。猶いなく却て勇士を愛し。足下の器量を惜を玉ひ。いろのも実の帰伏させん。と柴田佐久間の指他せられを。乃夫ものを命せられば。外の紛他さらるべし。只頼くの。速の齋藤同腹の念を防。永く織田家の忠を竭さば。武士の冥加の稱ふべし。と実意濃の解諭されて主水まもく感服なし。信長公の明察高慮。実の数るき入ていの吁ありがたや今日までの迷雲頓の晴彌を。昊天の日を拜をるうちを。只曾ねがふの良ねの下の仕へく真忠を竭し。天殊を

藤吉郎の寛勇上島主水を
して真實ふ
帰服せしむ

遁まんよりをわら作車なくい。此由所被露うのとりる。厥い結り
ながら大招めん。何とそ小ほど大澤の兄弟なる縁をもりあふぞ。
と不審られば義吉郎。莞爾と笑ふて襟底よりを一箭の書を
元ひざし。豆れか吉めをを開覧きば。これ兄次席たうが返書也
一見するよりを了はのを豆れも烟然とーしうち悔き。這い若天
自兄へ猶むし。密書の返簿ふしん。其性返子こそ使児弥助。
其若兄がは快ふ。返書い邪く過失あらんとは解のきめて返せ
しが。備い使児弥助まんも。豆君の間者なりつるろと渾身より
熱き肝をなじ。身の毛を怒らく怖なし。彩はを海元所祥
策を。めがらしあふ君が下ふ。などを殺ふを猶をこ。まをがりてこるる
べきや。誠ふ君の恩澤い須弥蒼海も比するふ足らぬ。切くい

万分の一とも。報ぜんこめふ兄をも招ぎ。寸自方ふ属まるをを
英徳攻しあふ其機会の素内者ふなきせんを。と言をふ木下
実ふ然こそ。厥いさりながら就子兄弟。眷属らりもを沈い
なーど。是我国のふむなれば。謀事を偏しあふなよ。英落を
代こと名めいるまど。這際の禅定い。権謀とせしひとろ
なれば。まず當的て今川義元。上洛せんとを推通ーべ。さりひを
固て決戦なし。あらしを他を所出馬られば。ちの心はふく
猶沼くも。内意を通ーおれよ。と疾ふ入て豆水を使ひ織田殿
の所義出上為豆れを見糸きを。至水が氏を今日より天澤
と革て。後ろとなーつるよし。言快しられば信長ゆも斜なしを
悦びふひ。なを自至水ふ盃場を。今ど級の君臣なりとうち

解あへば大澤主水。落涙なしく恩を謝し。本下と偽ゐ退出せり。信長益ゝ本下が。機智謀のなどを感じ。あざりて恩ゐ翻させ。大澤兄弟を自軍ゐせ〻緯。大張なる功なれと寵愛日〻ゐ佛ゐらゝ。嗚ゐ信長亦涼く。今川義元と合戦ある。緯定なきんと偽ゐを集め。軍議いらゐと命せらるゝ。禁面佐久間林ゐなど。勘ゐめらゝく和睦をのゝとすめ言とゐ上給助。最不興気ゐく在せしと。本下羽柴郎進をいぐく。老臣賢の志緯定。危きをさけ安きゐ属せゐゐこと文ゐたの意をゐるぜい且義元へ和使の儀ハ。英流攻なさで今川ゐ跡ちゝるまじ。緯畧なるを。其義ならんハ何の落ゐ和使を遣せゐふべき。佐ゐ今川へ陳条なゝへ。まりつく於る

べゝらゝ。弱輩の羽柴郎ゐ。老士を陶き意推を絆るハ悔なくいへども。軍議ハ君の大事なゝ。所存を置むハ信なゝ。縱令市郎ゐ解るゐなゝ。言帙一致なるところなり。今川義元上洛せんとて。駿遠三の兵士をひきひ。佐上るゐのなゝ。其勢四ゐ万ゐ。近ふべゝれど。軍ハ勢の多ゐよゝ。只是智畧と武勇をのゝ。彷頁を決するゐのなれバ。彼此對揚せゝとゐへども。などゝ為て事あゝんや。其等の義をおゞ〻めされ。決して陳条しゐふべゝゝ。君倘陳条しゐゐ陳義元遥ゐ上洛なし。天下ゐ旗を揚ゝる晌こと。其勢義百万と思ゐめゝ。然ある晌ゐ豆君ゐも滅ゐ使ひゐふべきゝ。又今川も狡捨なれバ。所緯ゐゐ織田殿の。和睦をいゝ実とすべき。

針畧のうちに悪人も悟もり。其上陸奥の鑓ゆい。當家の連枝の公達を。質とるべきぞん和議例とて。彩針ふく和議ゆ及ばず已後長く渠が指揮ゆ。恐ひ申さぞんば稱ふべうらぞ。倘義元が上洛なし。万一君の國をうばひ。他國ゆ奪されゆふとも。其晌いなむゆ道なうらん。然あらんは年来の君が武功も他となるべん。又ふろゆ和議絶ふく。倘今川が上洛せざんば。いろぐなしゆふべきぞ。義元上洛と聞くの後奥。餘も武門の甲斐なうらん。他家の下風ゆ麓くい易く。却返も緯い最うし。然もば勢の多少ゆよらぞ。家運を天ゆまかせ申ひ。合戦せることを待るべうれ。今川大軍なるうゆ。武田ゆ奥加勢せば。軍疑義とあらば申べうれど。よくく寛査しゆべし。

今信玄と義元と親きゆうゆ見れども。義元上洛せん晌ゆ。信玄何とて加勢せべき。其所猶いうと是を推さゆ。信玄原よりも大志ありく。拾國を弘げ武士を養ひ天下を旗を立んと為なれば。いろぞう義元の下風ゆうんやうこと今川上洛せば。信玄何を襲ふとも。軍の加勢ハ思ひもよらぞ。是ゆ為ゆ義元も。信玄ゆ心を疑ふこと。其故上洛も遅滞ゆ及べて。備又小栗氏康ハ毛来今川と和睦して緣者となるうれども。其為関東八箇國を領ぜし。二十余万騎の大勢なれば。なぞ今川の後輩しく。上洛の勢を助くべき。我君尾張一國の領主ゆて。こてもゆ申ふ事。大張四海を一流せるゆ。と思召てゆ申ふるりのを。武田今川小栗ゆおのく牛角の領國

ゐり。いつまも天下の望をあるべき。仍て今川が勢ゐを
へて。結ぶべかゝ武田の縡へ。御援勇あるべうもを。今川領の
軍兵凡ゐ万もあるべきを。當國の御軍勢ゐ。是を比られば
欲しゝ比。おのしめ共ハ理なれど。小軍をのゝ大軍ゐ。勝ハ
を招の指揮ゐよれを。丈義元の軍賦を。小原久しく被ゐ
ゐありて。大暨奈効ゆが。義元徒ゐ勇気を奮らし武士を
佛んと。傑士を用を。計畧施く。気疾ゐれば渠が軍の脆き
ことハ集蚊群蟻ゐ異なるを。何百万猗進るとも。傑なりて敵
敷さんゐ。拙策を苟よを易うるべし。倘今義元威ゐ矯く。
尾張の御領へ乱入なさば首をら君ゐ獻をるるを。是今川の
領國を天の賜る晌至を。我君とれを反ん。却て天意ゐ

逆ふべし。遠遭義元を伐捕ゐて。君の威風いよ〳〵つよく
鄰國武士ハいゐもさるを。遠を退て智者勇士君を慕ゐ
来らん縡。万河の波ゐ帰をるゐ如し。然しく君ゐ英流を汲
伊勢多んどを吹鎮め。速ゐ上洛ましく。王化を佐相く政
事を正し。朝威を四方ゐ為めしゐて。四海いづを背く
紛る秀逸御義軍ゐ。何とて遠く隔糸しゐひ。辱ぞうけ
ゐ。所謂ハ掌てゐるべし。約結しく言快せしゐ。信長
為きゐ號まゐ。雀躍をるまを共悦あるを。佐久間
林倚。疑ゐ因。羽吉郎の言を所。一理あるゐ仰を。是ども
義元ハ累代の名家ゐしを。智勇の武士もまを鞍し。小藤
武田の家よを。加勢せまじゐを縡。是ホ世方の推量

のこ。定りかゝる縁あるゝねば。緊と絆ひしがこゝろべし。加之當國おも。山口父子の逆賊あるゝ。今川家おも屬しゝれば。智多の郡の兵士輩ハ。大半欲と思れゝるおゝ渠倚い頗勇士おしゝ。當家の案内よく知ゝり。猥おゝ欲を侮ゝ。危き軍を勧め給しを。國家の大事を顧ざるハ。蘇忽なを短慮なり。と肩を顰めて盤回べ。羽右郎いうち怒ひ。涙く漾らせおいねべ。然量おかがもも理なを。彼嗚滅なる山口父子ハ。さく様ちべきまなるを。君おゝ今日を損亟ゝも活る時節の為なれば。世方にを動ゝさるとも。山口父子を遠うべ。義元これを敎ちべし。山口父子さゝ減るとゝい智多一郡ハおのづゝ自軍のものとなりのふさん。然それば今川の軍をむゝ合戦のゝより冥ゝうんおゝとなもなげなる接れおゝ依久留存て軍後おかいて虚言なし。山口父子をうつべきなり。義元そのゝさせんとゝ。何なるなおゝ羽右郎吟と然とし。あゝて聲おゝ山口ゝ。分の勅聲を見ゝおべし。山口父子が滅亡ハ。日をのゝて。敎へゝんことゝあゝゝ。倘山口がゝろび出べ。そのとゝ記洛系しゝおゝとも。遲きなハいはゝゝ。這遺の軍ハ山口が存亡をのゝて吉凶を。試を為ゝとのおゝ出ゝおゝ周。信長おも這義おゝ用ゝ山口の俳徴ハ四絃おゝり

戸部郎十郎窺山口勅聲　屬　木下偽戦

天目地耳よく伝声をきて。玄色を見る。孤ゝどおゝ海の

城を山口左馬助に不足織田家の領を食ひ行住所の安
堵なるもとなく是若の恩深なるべしと。自己が失よりて寵愛人
それを恨んぞ色若ふ引逆ひむる。強ふその身を滅せること。
天罰地耳の。恥しきなれ不なり。遠ふ過し日。山口左馬助が邪
見ふ記しなる。戸部彩左衛門が嬉子彩十郎ハ。又ゞ仇なる助
を深く恨と為を山林ふ探しの。山口父子を寄ふ殺ひ。御せりん
渠をうち。父の聲聴を消せんのと。立失をうそとのこども。一分
ふしを強ぐ。ひとまゞ撫川ハ羽柴秀ふ逸きて。羽柴を
怨んと思起る。強るふ羽柴秀ハ戸部彩左衛門存生の
時ハ深く水魚の交りをなし。聘使中なるが女をもらん彩左衛門が
書とし。これば。彩十郎ハ孫ふ当まり。遠若の縁あるをもって

使中なるを使をなるふ他史を怪る戸部が身のうへ。邪推ふハ
至るとし。と後名の苦郎ふ躾居しが。木下羽若郎頼ん。より。
遠車を所出し。渉聖孫を清ふ一計を謂含め。遠民演名人
巻しる。孫を清ハ秀吉が内言をうけ。真紙者ふ書ん。
彩十郎が書ふ。紙を張高く住後ごとふ。捆若の火ゑど
乞ふつけ。遂ふ彩十郎と親くなり。咱ハ濃若の若なるが。西紙
をのく遠若の菊布ゑどふ交易せんと遠く。家を焼を掃ぐ
ゑど。是ハ宮ねど世辞ふ。彩十郎もとの来ハ。実ふ英濃生と
思ひるゆや。言ものを何を密げ。基子ハ英濃のせるべ。
通函のるを名数を。尾張ハ大抵知ん。とせハまく
渉聖孫ハふい。英濃と尾張ハ年久しく。弓寄合く左ら

浅野弥兵衛
紙商人と化て
濱名ふ到り
戸部新十郎と
偽戰を
語る

しが。を来和睦ありてより。百姓ふもあれ。あ人まれ。最稼ぎ
往来せり。追遣も清洲を陪者ふ。織田の信孝中種くなる。
相度物ゝ有るよと。若ふ戸紛も河ふ根を撰し。さらへ
織田家の法士の中ふ。山口左馬助と云ふ者を。某子ハ知らくあら
ずあや。と問たれて然ると。都を濫ふし。足跡と紀伊国へ。
新十郎ふ若ていふ。願官をせ給ふ山口殿ふ。最傍し紀ふ
こをあれ。彼所郎ハ嗚ふ清ふく。清洲殿ふ對しをハ。大忠臣と
聞つるが。いふる故ふや。信長公の御軍勢嗚海の城へ
推進く。合戦せるふ屢ふり。清洲ハも嗚海へも手風
説を聞ハ。山口殿弟よを織田家の大功の志をるが何を
清洲の城より。軍を向たせ給ふやらんと。笑ひて不審を立

くい吸日や今日ハまぐ定めて。軍の最中ふるべしと古滑ふ
傳るを聞。新十郎ハ養を抱せ。涙き恨をの山口父子。他ぎふ
ゝけてうゝせんより。亡父の厨吳ふ新十郎が憤怒の及あてん
のと。髪冠を働たり。勃然として牙噛嗚し。怒かりてふ
部るを。洲壁弥三郎ハ成彩ふり。と情ふ表び嗚くふ。ふられを
報く辯去ふり。新十郎今ハ去ふ。山三も跡躊べきふあしぶと
去民のお方を襲し。他知れぬこを涙名を立出。白須賀
涙を正一つ地ふ。三列踊よ後せし沈ハ。既夕日も金くふ色ぬ。
北日ふ郭る空なれば。甲斐の孫ハ留ふりしが。二川の孫を
過るふ及びく。月光の助を抱しるべ。斐の名ふ呉者名ぐんと。
先走去るるどふ。斐の愛るところ景清ふる失刹の搦ふ嵩

戸部新十郎
山口を殴んと
身を窶して
鳴海へ趣く

踊りぬ。須磨より長浜迄より鳴海迄六里余あれば。足軽こゝに
能ゝるゆゑ厳川鳴海の堺方十町ゆゑ小軍とゆふへ。是本ゆゑ行あく。義吉席
を大ゐとし。一ゑ余勢ゆゑ。山口が居城なる鳴海の城へ推進
う。左るゆゑもれとゐるより清那なりる。大勢
発源。富貴。奴隷。久松なんどの人々か勢のゆを潜送る。
智多の備郡とゐ来ゆ戸郡滅亡の手後ゆ。山口を大ゆ結ひ
その拳止ゆを屬し。蹴蹴ひらぐと何ひ居るゆ。這遺徴田
勢一ゑだり。推進しゝ今ゆ既。罷ことを切を得合せ。鳴海を
さゝし能進る。新と見るより清洲勢。一千余騎を三隊ゆ郡ら。
一隊へ城の兵士とかゝ。一隊ゆ加勢ゆ能向ふ。これを見るより

山口父子。城兵五百を率徒へ。風旋閑ゝお変ゝ清洲勢
の正中へ鄭石の如く斬ゝ投り。右振右奮ゆ純ゐを。清洲
の軍兵ゆらゆ。と輸ゝ作ゆそひき退く。山口ゆらゝ
正鉢ゆ。馬を跳らを逞ゝ。清洲勢ゆ隙をくゝるゆく
取ゝ返しゝ。ゐ続の備陣連く。百挺だり。烟烈しく乱敵ゝ
山口父子もゆ勢の兵も。能顔ゆ後き進ゐを。後ゝも烟のを
ゆしゝひとゝも鐵石のゆらざれば。所をゆゝ蒙ひ入りけ。
長とも吹ゝ。義人ゐ。織田勢警く体をゆ。鳴声ゆふゝ
をるゆう。これゆ山口の軍兵と思ふゆ勲せ。義吉の新中。か
勢の兵ゆゝ。ありをるぞや。入勢く戦ゝ。どのゆ声一斉隊伍繕う
ゝゐ。院。若きゆ花ゐゐゆ。始ゆ智く共の猟由

木下
偽戰ヤ
りて
戸部
新十郎
狐疑せ
むる圖

大澤

あり。焼石も打て。吶喊勢へ射懸ー失て。捨ふてゝ逃れい嶽ゝー。
これを見るより加勢ゝる。大将の冨貴の軍兵ども。怒地こゝて打
殺ひ起り。這い傑畧不隙土やせん。と嬉ゝ陽ゝ清洲勢ゝる
先地ゝゝと推進ん。歩敵ゝ矢石ゝ来ゝぬゝ勢ゝの加
勢ゝ来ゝ孤殺ー。男ゝ母ゝ。是ゝを織田と山口と内通せし
計畧ゝ。我倫ゝ軍兵ゝ徒殺出ー。歎き敵ゝんとゝ見るつゝび
虚ゝとゝ戦ひ。忽地虎ゝ坑ゝ窮ゝん。厥ゝ退去とゝ
ゝ。一戦ゝ退ゝりゝる。今ゝ吶喊の一隊ゝれば。幅ゝ
ゝん強勢ゝ苟めゝ退ゝゝ。進兵ゝこれを攻ゝ来ゝ。
ゝゝ。退せゝ。彼ゝ撤ゝ。ゝも戸部彩十郎。這場畔ゝ御
細ゝ。軍の始終ゝ見ゝ見ゝ。織田山口の敵合ゝ勢ゝ那

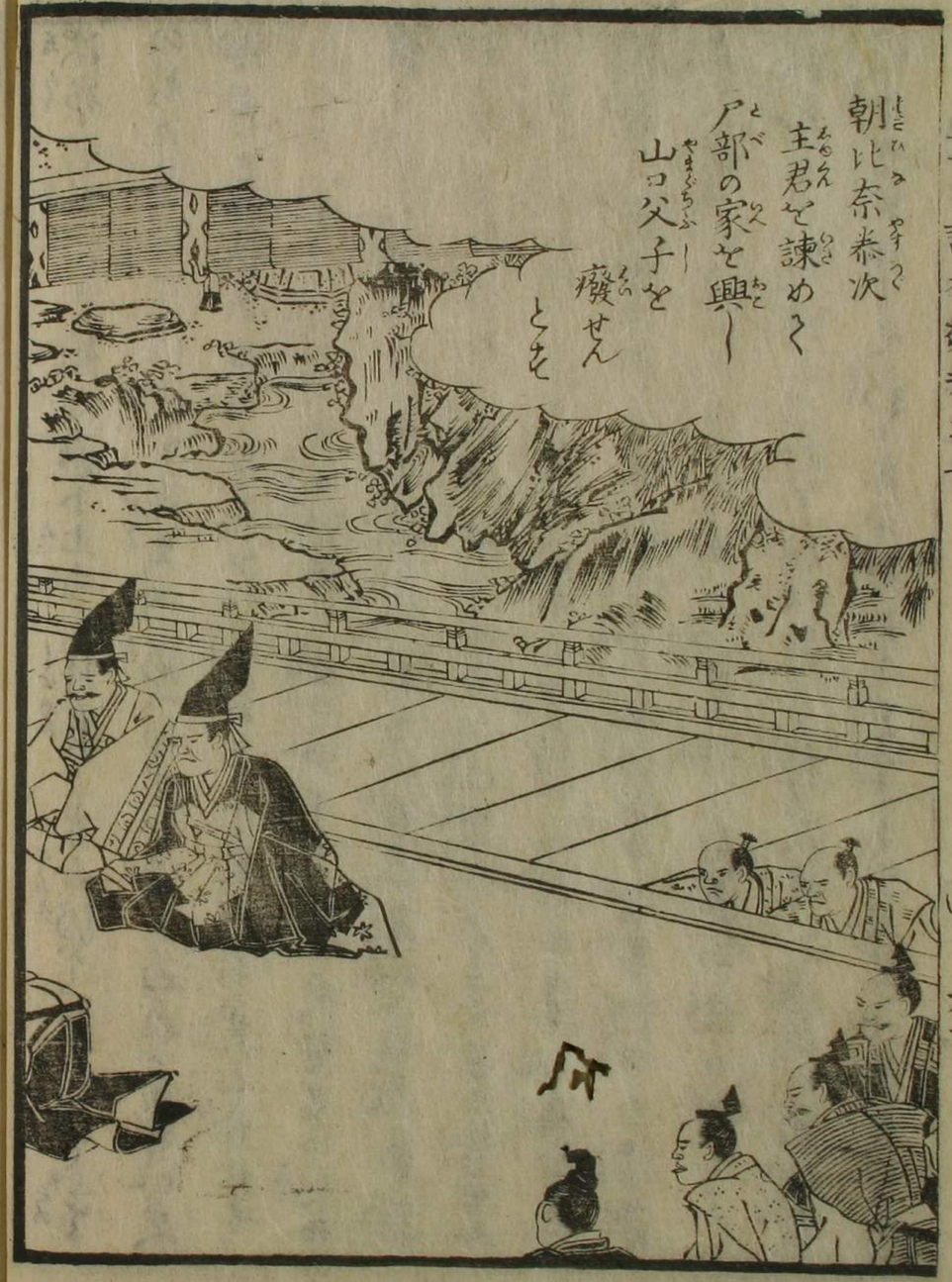
中の武士遊ゝ多ゝ伐せゝ。ゝゝ決定ゝ殺ゝ。
ゝゝ義元ゝ復仇ゝ。万屋山口父子ゝ父ゝ憤怒ゝ払
ゝん。と狂言三日這地ゝ為ゝ。ゝゝ指他ゝ吶決ー。遠兵当ん
ひき退去。渉世弥三郎ゝ頭ゝ戸部彩十郎ゝ陰ゝ
暗ゝゝ何ひゝ今彩十郎ゝ逃去ゝ見ん既謀成結ー
ゝ。ゝ名ゝ木下ゝ陣ゝ。略絶ゝ。ゝゝ告ゝ。今ゝ
これ事ゝゝと強軍ゝ指揮ゝ。吶喊の陣ゝ
洲ゝゝゝ退陣せゝ。智多の彩の武士遊ゝ。山口父子の
安ゝ殺ひ生ゝ。ゝ来ゝ。ゝ遺の合戦ゝ。徳歎ゝ。
大ゝ怒ゝ。彩中の諸士訴出ゝ一ゝ。後府ゝ。ゝゝ伸ゝ。
ゝ木下ゝ客付ゝ。山口父子ゝ悪逆ゝ天ゝ入ゝ罰ゝ

とと。宮ゐを出るみあやしうり。甚だどみ口ゐ彩十市に矣と日ふ
謗を名づけせん。是を見渕名ふ立ゆり。その来歴川ふいうつ。
朝比奈俊中ちふ射面し。左右の向も放胆出。渕数彩むせ
部て。氷歎の涯りゐうしゑべ。俊中ちる大ふ伏り如何ゐれを彩
十市ふい彩歎ゐると伺られて暇流る洞を巻ふ相[illegible]
又の彩左衛門糸来義乳ふ猛ゐうしゑべ。君のこゑふいゐありて。
獅逆言ゐゐうしを。軒紙ふ隆言せられ。忽ち渫敏の汚名ふ
おちいり。彩戟の中ふ鬼と化く。累代の所領を失ひ。俊羅
夷男ふ憤迷しうん。それを男へば自分を忘れ不覚の洞ふ
赤面せり。明ふ俊若の実君を礼し。是を深しく亡親が迷眼
を嘆させんと男へども悲しや咱い鉄鎖の身の上倶不戴天

の教徒ハあれど。仇ハ一城の主ふして。況ふ咱分ハ彩ごふも。最
ちさすしき惟悴武士。仇を眼芋ふ安ゐゐうこれを撃ハうこと
ゐるひゐゐく。那天の時ふ。本意を遂んこれを男へ死も死ま。
一日ま時も存生ゐゐし。然ども御家ハ亡父の旧交。まして主
ふ中ふして。冊江嬢の汚名尽も。男ひ来て如何什りゐうち
おしきゐゐふかもたうめとゐゐば言さして悔こと泣ふ。俊中ちる
不使ふ男ひ。彩る哀悲ハ然ることゐゐら。彩たのハ再ふして。
某子ハ涌家ゐゐ孫ふしあれば。偏至戸弱の家を奥し。亡父の
恨も晴しうく。存子の私も雪せんと日夜心をくけども。
今ふ時運の至らぬを。矢石の如く男ふとも。徒ゐたるをいうば
せん。徒意ハ功の成ざるを。某子ふも切意ありゐうら。何とて

彩る歟きをゐんとせるゝ。老波安ひ窓むれば。彩十郎涙うち掘。今こゝ父の仇を伐家を紀べきを時ゐれり。然ども順等缺籍の分ゐれべ。これをゐ若へ祈て。仇を伐べき道を切ゞ。兵粮いくハ程父の恙悲りて。若ゐ祈祝の冊解偈をゝのまゝやとかゝひゝゝもし。不得を得ゐ得りりふさん。开も呼海ゐる山口父子ゝ。今川治三の右臣敵して。織田織田家の後ゐゝう。這遣呼海の軍と所。晌こゝ冠ゐれ孔軍ゐ。終投て山口を敵切んりのと彼而ゐ到り。蹺蹊をゐれば彩敢ゝこゝ如條くゐりと父もゐく。始徒を拒得る。仇中ゐ大ゐ驚るき。彩る大りの起るといふも。戸紀の家遅のをゝる而。それおて思筋ゐれば。先日彩左衛門ゐ撃出一時清洲方と得ゝる。戸紀を彩る山口ゐ婚子九郎

次郎を安宗。と織田家不止めて推参しゐも仇切ゐ死一ゐゝ。その内九郎次郎清洲を逃出。呼海へ帰て遣りぬれども。それ又織田より代兵ゐ向ゐる。これ不審きふゝゐり。其ゐ合せて見る晌い這遣呼海の合戦ぶう。山口織田ゐ一致して。智多の郡の武士遣ゝ。敵捕ゐるゐ切遣ゐ。おりへい西きゐ絨ゐゐ。乃義出地ゐ這ゐゐ。織府へ泊伸ゐ。ゐるゝ。山口父子ゝ某ゐゐ撃せん。式ゐゐ延引ゐゝ。先ゐ迷ゐと準備しゐ。伐中ゐ馬ゐゝ。織府の城へ出仕ゐ。彩ゐ而へ尾兵ゐる。智多郡中の伐家名ゝ祈出ゝひとゐゐ。織田山口ゐ焼ゐ。軍ゐ。伐士騒ゐゝ戦死せゐ。得ゐ。これを泊伸せり。程さへなくて織川の朝廷家伐中ゐ出仕して彩十郎ゐ目ゐ。ゐ。先ゐ。ゐるゐの次第合戦の


朝比奈泰次
主君を諫めく
戸部の家を興し
山口父子を
癈せん
とを

如く言快しられば義元大ゐに憤怒なり。嗚呼怪なり山口父子。素及間のうめるりとん。織田家ゐ出仕せるよりなれば。甚を実と思ひ迎。弟至るこを疎略られ。臍我ゐ宕ありて。過ちのなき彩十郎を後言しこれを敵捕。かゑ生きて這遣。智多の郎士を継き伐。かりくばく惜ら山口。佞ハ織田家ゐ合体なり。我上洛を咎止んと密ゐ謀るめるん。然らば戸部が迷跡をかこ。山口父子を伐せもや。彩十郎ハいづくゐ生と冒れて朝ハ宗然きべい。彩十郎ハ郎ゐ生ついゐ居が。女を嫁へ婿なれば。彩十郎ハ孫なり。所城ゐを私奪いこと後ゐ佞のなゐ思ひつれども。清良もせで帰りつるゐ。這ハ浜名のを辺ゐて。潔く兄出しいき。如何ゐ為ゐ駿府をば。退去しこ思材ハとその意趣企儀つらまつりしゐ。

父が戦死せしとハとれ山口が彩謀と存じ。直ゐ駿府を発出て。尾張三河の四辺ゐ解居。山口父子を呪ひしゐ。山口が威勢さうんゐして。彩十郎が猪力ゐて。報讐と云も及びがたし。時節を伺ひ潜むうち。這遣の変ゐ出来まり。その孔軍の虚もあらば。山口父子をゐ捕んと戦場ゐ投て勅静をなるゐ。合戦ゐ右ゐ面背ありて。山口城を出合されば。佞ゐ立帰りぬ。彩十郎ハいつゐ本言を遂ん。何容くく存生和晒さんより。後搦欠て死ぬべきの。と覚期なせしを潔くゐ。家て冒弁ゐ留置こり。恰も彩十郎が逐電の咎を所叡せさせ西ひ。戸部が家名を真させ西ひ。幕中の佞士の右信を勅むるこげをゐもなゐ。りふさんゐ。只管祈ひ祷る。と道理を竭して説諭せしゐ。義元

見ふ殺明ゐし。彩什のゐありゐ〳〵。紛らぐ遁ふし悔しさよ。然べ山口父子が係罪戸紹が蹟蹟の死扱。某方冥きふ了留られよと命を生て朔比奈ふ。まづ彩十弟を執遣つ。戸紹の家名をお續させ。然して山口係伐の係いろふと佞士を集め。これを保定臣るふ。明海へ推進せ伐んりのと皆一同ふ勇をるを。朔比奈ふを制して云ゆう。山口父子を伐んゐ。勇きふ似られど大ゐあり。渠偏清洌と合体ゐ〳〵。家を忍べ容易ゐるまじ。彩ふ自云の兵士をも。換えんとあゝん。如ど智略をりて勝べ。りつとも易くいらん欲。今乃義が男ふ不ふ。尚屋形より使者を遣られ。山口父子を呼寄せん。ふ其使況ふい今川殿。這遣上洛の係ふ屬て。別て君より所牧あり。ゐ迷出仕あるべ。と偽送るりの

ゐ〳〵べ。山口父子ふ変ひのことふ思ひ。清洌へ泊伸の種ふせん。と脱びあいて糸府せん。其とを殿中ふ勇士を伏垂生捉て殊戮せべ。一矢一石紋費せど。滅さんこと易〳〵んと。言ちゆ佞士もこの義ふ同じ。まづ彩十弟を招き出して。左馬助を捨ふせゝふ。これを命ぜられべ。欲去ことゝぎりゐ。彩て明海の使士あい平松次郎三郎。山門慶三郎。這友人をつゝい〳〵。山口父子を招れゝり明海の城白山口左馬助。使況の結を承所。彩ひもせど使者を返し。出仕の準備ゐ〳〵ると。嫡子九郎次郎父ふ向ひ。今殿府より招ゐゝさも。外面ふ清洌へ従ふ勿ゐれば。一意織田へつけて後。糸向ありて然るべ。と言せ〳〵ども左馬助ふ。此程よりの姑絶といひ。織田ふ色の

おろそ撰舎ゆ名彼此の乱妃もなく。父子一偕お馳変ひと
の〻發府へ移こと玄傳ふれ

繪本豊臣勲功記 初編巻之七